第 10 回　優秀賞(銀賞)受賞作品

「霧川の童」

山形県立山形西高校二年　　高田　有優美

賢　治　の　ま　ち　か　ら

全国高校生☆童話大賞

優秀賞〈銀の星賞〉

『霧川の童』

山形県立山形西高等学校二年　高　田　有優美

ええ、わたくしは確かに川の向こう側で、なんとも不思議なお人に育てられたのです。その方の名はサヤカノミナユキヒメと申したかと思います。わたくしはミナユキとお呼びしていました。

彼女と出会ったのは、わたくしが子供の頃でした。なぜそこにいたのかも分かりませんが、わたくしはぼろぼろの着物でわらじも履かず、膝を抱えてただ泣きじゃくっていました。街道の端で泣くわたくしを見つけたミナユキは歩み寄って言いました。

「こんな所で童が一人泣いて、一体どうしたのですか？」

そう天の方からかけられた言葉にどれだけ安心したことでしょう。黄昏時（たそがれどき）でしたのでお顔も見えませんでしたが、たいそう不安で心細かったわたくしはミナユキにすがり付くようにして泣きました。それにはたいそう驚いたようでしたが、彼女は泣きじゃくるわたくしを抱えあげてくれました。涙は自然と止まりました。彼女からは水のような美しさと、優しさが子供ながらに感ぜられたのです。それからミナユキはわたくしに、お名前はなんていうの。お母様やお父様はどこ。どこから来たの。なぜ泣いていたの。などと聞きましたが、わたくしにはその答えがわからず、ただ首を横に振りました。ミナユキは困って、近くに縁のある者がいないかと確かめましたが、辺りに人の影はありませんでした。もうじき日が暮れるのですから当然です。街道と言ってもそこはたいそう寂れていて、もとから人の往来は少ないのでした。それでも近くには小さな宿場町がありましたが、町の人は闇夜に紛れて現れる盗人などを恐れ、暗くなる頃には誰一人として町の外を出歩かないのです。童一人でいたら、無事では済まないでしょう。しばらくしてミナユキは決めた、とでも言う風に頷（うなず）きました。

「私にしっかりつかまっていてくださいね。」

そう言うと彼女は、わたくしを抱えたまま街道に沿って流れる川へと入って行きました。

頭のてっぺんまで水に浸かってしまったらどうしましょう。息ができないのではないのかしら。と不安がよぎり、ミナユキの着物をぎゅっとつかみました。しかし実際は水に浸かるといっても、せいぜいわたくしの足が浸かる程度でした。霧をかき分けて進んで行くと、ようやく対岸が見えました。そこに一軒の家が静かに佇んでいます。それが私の育った家です。その中は広いお座敷や、川を望む縁側などがありましたが、どこにも人の気が無くひっそり閑としていました。

「ここがあなたの家ですよ。」

「あなたも一緒？」

わたくしはミナユキに尋ねました。すると彼女は笑って「そうですよ」と言いました。

「それから、あなたに名前を差し上げましょう。名前が無いなんて、悲しいでしょう？」

「なまえ……？」

ぽかんとして言ったわたくしを、優しい眼で見つめながら彼女は言いました。

「そう、あなたの名前です。ゆきというのはどうでしょう。」

「ゆき」という言葉が染み渡っていくのを感じました。わたしは、ゆき。ゆき……。ゆき……。何度も胸の内で繰り返す言葉は、徐々に形になって溢れました。その様子を嬉しそうに見ていたミナユキは、強くわたくしを抱きしめました。その温もりが彼女との繋がりを、よりはっきりと感じさせました。

「ありがとうございます。……ところで、あなたの名前はなんていうの？」

「ああ、そうでした。」

少し腕にこめる力を緩めて、わたくしの顔を見て、笑って言いました。

「私の名前はサヤカノミナユキです。」

「サヤカノ……？」

「サヤカノミナユキです。ミナユキでいいですよ。これならゆきも覚えられますよね。」

それが嬉しくも恥しくも感じられて、わたくしはミナユキの視線を逃れるように彼女の胸に顔をうずめました。それから小さく「ミナユキ」と新しくできた家族の名前を噛み締めるように口にしました。縁側から吹く穏やかな風が、庭に咲いている花の香を運ぶと、それが部屋に満ちていきます。わたくしはあっという間にミナユキに懐き、この家が好きになりました。

それからわたくしは毎日のようにミナユキと共に、川の向こう側へ行ったりして遊びました。わたくしは時折彼女に尋ねました。

「なんでわたしたちは町に住まないの？」

毎日のように川の向こうへ行くなら、最初からあっちに住めばいいのではないかしら。わたくしは、これは名案ではないかと思いました。ですが彼女は静かに首を横に振って、ただ一言「これで十分なんですよ」とだけ言うのでした。

またある時は、

「ミナユキのお仕事ってなあに？」

と尋ねると、彼女は静かにその顔に笑みを湛えて「川を守り、人々を守ることですよ」と川を見ながら言うのでした。その意味がわからなかったので、家の近くに住んでいる人にも聞いてみましたが、やはり同じような答えでした。ですから、わたしにはまだわからないけど、きっとそうなのだろうと思い、それ以上の追求はやめました。わたくしには彼女の正体がどうであれ、唯一の家族でしたし、大切にしてくださっているということもよくわかりました。ですから、べつにわからなくてもいいと思ったのです。

それから幾年か経ったある日、わたくしはいつものようにお庭のお花を眺めて過ごしておりました。その頃になりますと、わたくしはミナユキにべったりと張り付くこともなくなり、彼女もまたわたくしとずっと一緒にいるということもなくなっていました。どうやらその日、彼女はどこかへ出かけていたらしく、川の向こうにもいらっしゃいませんでした。そのせいかいつも以上に辺りは静まり返っていました。風とお花が戯れて話に耳を傾けていますと、どこからか男の方の話し声が聞こえてきました。

「なあ、そろそろ俺たちも消えちまうのかねえ？」

「そう言うなよ。今までだって何柱もの仲間や、物の怪(け)が生まれては消えていってんだ。いつかそういった日が来ないとは思ってなかったろう？」どうやら二人でお話しているようです。誰かしら、と縁側からそのまま外に出て、声の主たちを探しました。家の裏のほうにある土手を登って、露に濡(ぬ)れた草の上を歩いて行くと、そこに二人の男が座り込んで話をしているのを見つけました。彼らには覚えがありました。何度かミナユキとお話しているのを見かけたことがあります。

「――だがねえ、俺らは信じてもらわなけりゃ消えちまう。ここ数十年で何柱消えたことやら……。おっかねえ勢いで消えてんだ。わかっちゃいるが……どうも駄目だ」

がっくりとうなだれていた男は、遠くの川の向こうを眺めて言いました。

「ああ、ここ最近は特にひどい。シナより遠くの海の向こうから新しいのがどんどんやって来てる。寂しいが、時代なんだろうな。」

「サヤカノミナユキヒメはまだいい。人の子を育ててりゃ、間違いなくその間だけは生きてられる。」

彼らの間にしばらくの沈黙が流れました。つまりどういうことかしら。ミナユキたちは消えてしまうっていうことかしら。ぽつりと一つの雫が草を濡らします。ぽつぽつり。眼から次から次へと溢れては落ちていきました。草よ、花よ、誰にも教えないで。わたくしは身を隠すようにしゃがみこみましたが、それはまったくの無駄でした。

「あれって、サヤカノミナユキヒメんとこの娘だよな？」

そう言った声が聞こえると、次に草を踏み分ける音が近づいてくるのがわかりました。ああ、このままではいけない。わたくしはとっさに駆け出しました。顔を隠して、元来た道を戻って、さらに川の向こうに向かって走りました。ミナユキも、みんな消えてしまうなんて嫌よ。絶対に嫌よ。誰かに伝えないといけないのだわ。わたしが伝えないといけないのだわ。わたくしは力いっぱい水を蹴り上げて、霧に視界を奪われながらも、ただまっすぐに走り続けました。

気がつけばそこは寂しい感じのする街道の端で、すぐ隣には古ぼけて苔を生やしたお地蔵様がありました。霧が立ち込めていたらしい跡などはこれっぽっちもなく、お天道様が元気そうにしていました。わたくしは乱れた着物

を整え、息を整えて、寂れた街道を進みました。この先に宿場町があるのです。初めて一人で川の向こう側へ来たので当初は不安でしたが、ミナユキと共に通った慣れた道でしたので、何の問題もなく宿場町に着くことができました。

そこでは人々が忙しそうに街道から繋がる大きな道を走ったり、お店の前で談笑などしていました。わたくしはきょろきょろとしながら、誰か話を聞いてくれそうな人を探して町中を歩きました。

「ちょっとあんた、そんな格好で娘一人で出歩くなんて危ないよ。」

そう声を掛けてきたのは、お茶屋さんのおかみさんでした。わたくしは何かおかしい格好かしら、と身なりを見ました。少し裾のあたりが汚れていますが、特に崩れている様子は見当たりません。

「そうじゃない。そんな小奇麗な格好の娘が一人で歩いていては危ないってことさ。あんた、人攫(さら)いに遭いたいのかい？」

小奇麗、と言われたのは当然のようでした。辺りを見ますと、飾り気の無い質素な、あるいは薄く汚れが染み付いたような着物が目立ちます。その一方でわたくしの着物は、水の紋などの模様が施されていました。

「特にそのかんざし、随分と高そうな代物じゃないか。そんなのが目に留まったら、変な連中に声掛けられても仕方ないよ。」

「これですか……？」

おかみさんは頷きました。それは小さいけれど、細かい細工の施された品でした。確かにそこらでは手に入らないでしょう。

「これ、わたしを育ててくれた人から貰った物なんです。でもその人は、この町の人に信じてもらえなくって、いつか消えてしまうんだそうです……」

「そうなのかい、それは大変だねえ。」

わたくしはなんとかミナユキのことを伝えようとしましたが、その時お店の方から彼女を呼ぶ声がして、わたくしとの話は終わってしまいました。やっぱり町の人たちは忙しいのでしょう。仕方のないことです。わたくしはまた町の隅の隅まで、誰か話を聞いてはくれないかと探して歩きました。

町の外れの水田が広がる場所に出ました。鳥威(おど)しが風に吹かれて微かにぶつかり合い、音を奏でています。また、田んぼの真ん中には質素な鳥居と

小さなほこらが建っていました。わたくしはその様子を眺めながらため息をつきました。町の人はミナユキたちを信じなくなったのに、なぜほこらはこんなにも身近にあるのかしら。そこに祀(まつ)られているのはきっと田んぼの神様に違いありません。人々は神様に豊作をお祈りしてお祭りしたり、供物を捧げるのでしょう。ですがミナユキはどうでしょう。わたしは知っています。彼女は川を守り、人々を守っています。時には怒ったりもしますが、彼女はいつも人を大切にして、彼らと寄り添って生きていました。それでも時の流れには逆らえやせず、彼女は過去のものとなろうとしているのです。また涙がこぼれそうになります。

「どうしたの、こんなにお天気もいいのに泣いたりして。」

ほこらから声がしました。わたくしは何事かとその方を見ました。するとそこには稲穂の色に輝いて見える女の方が立っていたのです。そのお人は滑るようにしてわたくしの方へやって来ました。いいえ、滑るというよりも、浮遊しているようにも見えました。

「あなた、ミナユキのところの娘さんでしょう。」

「ミナユキのこと知ってるの？」

わたくしは濡れた眼を拭(ぬぐ)って言いました。

「ええ、知っていますよ。彼女は私の一部であり、無二の親友とでも言うべき存在ですからね。」

ほら、と彼女は袖を広げて水田を指しました。風を受けてさわさわと金色が揺れています。

「彼女がいるから私の元に人々が集い、稲穂が育つの。彼女には本当に感謝してるわ。」

「でも、ミナユキが消えてしまったらどうするの……？　わたし、ミナユキたちは人が信じてくれないと消えてしまうと聞いたの。だからここまで来たんだけど……」

わたくしは口をつぐみました。悔しさと不甲斐なさとが混ざって、上手く言葉が出てきません。それがまた悔しくてたまりませんでした。

「ほらほら、そんな顔をしてたらお天道様だってどこかへ行ってしまうわ。」

袖からちょんと出たそのお人の伸ばされた手に頭を触れられると、そこから温もりが伝わり、黄金の稲穂のにおいが漂ってきました。

「それにね、信じてもらうことより、感謝の気持ちの方が私たちにとって大切なのよ。」

彼女が言った言葉の意味など、幼い子供であったわたくしにはわかりませんでした。信じられないと消えてしまうのに、それ以上に大切にすることがあるのか。それはわたくしにとっては、食べないと死んでしまうのに、それ以上に大切にしないといけないことがあるのか、ということと同じように思われたのです。わたくしはそのお人の澄んだ瞳が美しかったので、ただじいと見入っていたのでした。するとまっすぐわたくしに向けられていた眼は、水田の方を向きました。

「――噂をすればお迎えが来たようよ。」

彼女が目を向けたところを見ると、水田の方からミナユキが小走りにやって来るのを見つけました。その姿はいつもと同じで、輪郭もはっきりしていましたし、影もちゃんとありました。彼女はわたくしの元へ来ると、ぎゅっと抱きしめました。息を切らしてその肩が大きく動いているのを感じました。

「もう、余計な心配かけさせて……」

「ごめんなさい……」

ミナユキはわたくしが無事であったことを確認すると、やっと安心したようで、いつものように微笑んでくれました。それから女の人を向いてお礼を言いました。

「ごめんなさいね。迷惑じゃなかった？」

「いいえ、全然。久しぶりに人と話せてむしろ嬉しいくらいよ。」

久しぶりに、というのは正直思ってもみませんでした。ああしてほこらがあるのに、人の眼には彼女の姿も見えないなんて。その事実はわたくしにとって相当な衝撃でした。

それからわたくしはミナユキと手を繋いで、帰り路につきました。お天道様もお山の下へと帰っていくところでした。わたくしは両の手で彼女の手を握っていたので、地面に並ぶ影は赤く染まった地面の上にぴったりとくっついていました。そしてわたくしはその言葉をぽっと口にしてしまったのです。

「ねえ、ミナユキはわたしを置いてどこかへ消えたりしないでしょ？」
ミナユキの手がぴくりと動きました。わたくしはすぐに、言ってはならなかった、と思いました。なんて不吉な問いかけでしょう。なぜわたしは「消える」という言葉を使ってしまったのでしょう。それにミナユキは返事をせず、黙々と歩を進めました。怖くなってちらりと彼女の顔を見ると、口をぎゅっと結んでいるように見えました。なぜ黄昏時なの。ミナユキの顔がよくわからない。わたしに微笑んでくれても、これでは見えない。代わりにわたくしの眼に飛び込んできたのは、川のほとりに大きく咲いた彼岸花でした。
どうしてこの花が忌まわしく思われるのかしら。今まで何とも思わなかった彼岸花が、どうしてかその日は嫌で仕方ありませんでした。あの日からミナユキのわたくしに見せる笑顔が少し変わりました。時折眼を腫らしているのを見るようになりました。やっぱりわたしの言ったことを怒っているのかしら。そう思いながら、やはりわたくしはいつものようにお庭を眺めていました。するとそこへミナユキがやって来たのです。
「ゆき、今日は少し遠くまで出掛けましょう。お山に連れて行ってあげる。」
風が運ぶ花の香が久しぶりにわたくしの心を満たしました。ミナユキがわたしを誘ってくれた。ただそれだけが嬉しかったのです。
そのお山は宿場町よりも遥か遠くにありました。川を渡り、街道を越え、分かれ道を右へ左へ。川からどんどん離れていきました。それから雨風にさらされて今にも崩れてしまいそうな鳥居をくぐりました。山道の入り口です。そのお山の空気は今まで行ったことのあるどの場所よりも澄んでいるように感じました。いいえ、もしかすると不思議な気が漂っているのを感じたからかもしれません。川を覆っていた霧にも似たようなものを感じましたが、ここの空気はそれ以上だったように思います。
お山の中にある大きな木々に囲まれたそこが、わたくしたちの目指している場所でした。そこにはお寺と神社が並んでいました。その大きさに見とれていると、ミナユキはわたくしの手を引っ張ってお寺の方へ向かいました。行ってらっしゃい、とミナユキに言われ、わたくしは一人でお寺の中へ入りました。その奥で住職に会ったのです。嫌な予感がしました。元の暮らしに戻れないのではないか、わたくしの前からみんないなくなってしまうのでは

ないか。その予感を裏付けるように住職は告げました。あなたはここに住むのですよ。

わたくしは走りました。急いで、早く、早く。しかし外に出るとすでに遅かったようで、どこにもミナユキの姿がありませんでした。

「ミナユキ！　どこ？」

何度も叫びました。どこかにいるのでしょう。だって彼女がわたしを拾って、育ててくれたんだもの。それなのに、どうして。涙を堪えながら、震える声で大好きな人を呼びました。

「ごめんなさい、ミナユキ！　謝るから、謝るから……！　ねえ、帰ってきてよ……」

崩れるようにして泣きました。泣いて、泣いて。まるで幻のように、霧と共に消えてしまった大切な人。手元に残ったのはその人からもらったかんざしだけでした。

ふふ、こんな現実味の無い話なんて今時の人は信じないのでしょうね。わたくしだって今では時々、本当は別の人がわたくしを育てたのではないか、ミナユキたちはすべて夢だったのではないかしら、なんて思ってしまいますもの。仕方ないわ。でも彼女からもらったこのかんざしを見るたびに、そんなことを考えるなんてばかだと思うの。今ではもう彼女のような存在を目にすることはなくなってしまったけど、それでも彼女たちはわたくしたちに寄り添って生きていると思うのです。

――あら、すっかり話し込んでしまいましたね。この話はこれでおしまい。続きはまた、今度ね。